

複雑化する日本の安全保障



Vol.10
ソ連の終焉

私が最初にモスクワを訪れたのは1990年の春のことです。事務次官を退官し防衛庁顧問となっていた西廣整輝にしひろせいの通訳として、ソ連・イギリス・アメリカと3カ国を回る旅でした。モスクワで訪れた先はアメリカ・カナダ研究所のアルバトフ博士、当然英語は流暢な方です。「君たちは、バカだ」それが西廣の最初の発言でした。

東側の陣営が崩壊して以来多くの資料が収集されてきました。特にマスコミで報道されたのは、秘密警察による市民の情報収集がいかに徹底的になされていたのか、罪もないように見えた隣人が実はスパイだったというような、自由と民主主義を謳歌する立場からすれば衝撃的な事柄でした。寡聞にして、我々のソ連の国力に関する分析が十分に正確でなかったことについての検証を聞いたことはありません。

もう一つ考えておかなければならないことは、どのように判断がつけられていくかというプロセスについての理解です。追い詰められたら敵は乾坤一擲の大勝負に出る、という想定は、安全保障政策を担当する者としては最悪のシナリオとして考えておかななくてはならないことでしょ。そのリスクに十分に備えておかななくては、かえって災いを招くということにもなりかねません。同時にそのように準備するということは、

いきなり、バカ、とは。さすがに訳しかねて「いいんですか？」と聞き返しました。「いいから、訳せ。理由はその後説明するよ」あんな無茶な通訳は、後にも先にもありません。正直に訳したときに、さすがにアルバトフはムツとした表情でした。

冷戦が一気に悪化したソ連のアフガニスタン侵攻のち、米国は欧州正面のソ連の圧力をかわすために日本に極東で第二戦線を開くように働きかけてきたことがあります。その急先鋒は国務省のリチャード・ソロモンでした。日本側は反対します。その論陣を張った二人が西廣でした。「第一次大戦の後、日本はシベリアに出兵して大変な損害を被った。その経験に照らせば、第二戦線を極東に展開するということは兵站（※）の点から見ても不可能と言わざるを得ないのだ」

アルバトフ博士に対する説明の要膨大なコストを払うことでもありません。ソ連の場合、当時の指導者だったゴルバチョフ大統領が選んだ政策は、内政の改革を進め国力を立て直すことでした。結果としては失敗に帰し、守旧派によるクーデターのために改革は頓挫し、最終的にはソ連の解体という共産主義者の目から見れば最悪の結果を招くのですが、軍事的な冒険主義が内政改革よりも賢明な選択だったということも言えないでしょう。確かに1941年に大日本帝国は軍事的冒険主義へと走りました。しかし核兵器のない時代の決断と、米国と並ぶ核の超大国だったソ連の置かれた立場とその決断とは、比較すること自体が合理的ではないでしょう。

アフガニスタンに侵攻してから10年で、ソ連は最後の時を迎えつつありました。1989年11月ベルリンの壁は崩壊します。建国40年を祝う年に東ドイツは解体へと向かいました。40周年の祝賀の式典に参加した

旨はこういうことでした。じつと耳を傾けていた博士が言ったことは、「だからグラスノスチ（情報公開）が必要なのだ。我々は、軍から第二戦線の脅威を聞かされていた。それが幻想だということは全く知らなかった」

呻くような話し方でした。

崩壊したソ連で、軍がどこまで安全保障にかかわる情報を壟断していたのか。私には知見がありません。アルバトフ博士のような人が、どこまで政策決定過程に参画していたかわかりません。しかしあの無念の表情から思うに、尋常のことではなかったように思うのです。そこから想像できることは、西側が思っていた以上に脆弱なソ連の姿です。そのことは逆に言えば、1984年危機説（※）というものは、西側の妄想に彩られた部分が少なからずあったのではないかと反省でもあります。

ゴルバチョフは、改革に後ろ向きだった東ドイツの指導者に対して批判的でした。自らの勢力圏が解体していくことを指導者はどのように見ていたのでしょうか。

※作戦部隊の後方で食糧や軍用品の調達・補給を任務とする機関とその運用。



西 正典

Masanori Nishi

1978年東京大学卒業、防衛庁に入庁。那覇防衛施設局長、内閣官房遺棄化学兵器処理対策室長などを経て2013年防衛事務次官。2015年退官。現在ボストンコンサルティンググループ シニアアドバイザー。